

読書教育と文章指導による思考する力の育成

——本の紹介文（ビブリオエッセー）作成を通して——

Fostering Critical Thinking by Reading Education and Writing Instruction:
Through the Creation of Book Introduction “Biblio Essay”

大西 光恵

OHNISHI Mitsue

I はじめに

2016年12月の中央教育審議会答申において「読書は、国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである」と示されたことをふまえ、学習指導要領では「知識及び技能」に「読書」に関する指導事項が位置付けられている。高等学校学習指導要領国語においては、「学びに向かう力、人間性等」に関する目標として、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させることが明記されている¹⁾。

一方、読書環境の現況は、読書機会の減少や読書への苦手意識と必ずしも学習指導要領に沿ったものにはなっていないように見受けられる。

このような読書現況の改善には、読書への動機づけ等主体的行動が必要であり、この主体的行動は、思考する力と密接な関係があるのではないだろうか。本論においては、読書に向かう動機づけを促進するビブリオエッセー作成を通じた思考力の育成について考察していく。

II 読書教育について

1. 読書環境の現況

(1) 中学生と高校生の読書の変化

2024年度実施の学校読書調査（全国学校図書館協議会）では、1か月間の平均読書冊数は、中学生（3,496人）、4.1冊（前回比－1.4冊）、高校生（4,604人）、1.7冊（前回比－0.2冊）である²⁾。図1が示すように、前回まで順調な伸びを見せていた中学生の値は減少している。

図2は、1か月間に1冊も本を読まない不読者の推移を示している。不読者の割合は、中学生は23.4%（前回比＋.3%）、高校生は48.3%（前回比

＋4.8%）となり、すべての校種で増加している。特に、中学生は2006年以降で最高値を示している。

この調査から、中学生の平均読書が減少していること、1か月間に1冊も本を読まない不読者の割合が中学、高校共に前年度より増えている現状が伺える。注目すべきは、高校の不読者数が多いことである。



図1 1か月間の平均読書冊数の推移



図2 不読者（0冊回答者）の推移

全国学校図書館協議会、2024年のデータを参照に作成

(2) 16歳以上を対象にした読書量の相違

2023年の文化庁による16歳以上を対象にした「国語に関する世論調査」では、「あなたは現在、1か月に大体何冊くらい本を読んでいますか。（電子書籍を含むが、雑誌や漫画は除く）」の質問に対して、「読まない」が62.6%（前回比＋15.3%）となっている。過去の調査結果（平成20、25、30年度）では「読まない」の割合が47%台であったが、今回はそれをはるかに超えている。「読書

量は、以前に比べて減っていますか。それとも、増えていますか」の質問に対して、「読書量は減っている」は、69.1%（前年度比-1.8）と過去の調査結果とあまり変わらない。

中学、高校生の読書離れだけでなく、大学生卒業後の大人においても読書をしない人の割合が高くなっている実態も報告されている³⁾。こうした現況を払拭するためには、専門学校や大学生の段階においても生涯にわたり読書に親しみ、自己を向上させる習慣を身に付けることが必要となっていく。

2. 読書教育の意義

(1) 読書の営み

山元 (2015) は、本を読むという営みには、次の三つの対話がなされているという。すなわち、その本の著者（作者）との対話、自分自身との対話、これまでの生活の中で出会った人やものとの対話である。こうした三つの対話を通して、読者は自らの内面を大きく広げていくことが可能となっていく。山元 (2015) は、読書がもたらす営みとして次の3つを挙げている。（下線は稿者が添えた。以下同じ）

- ① 自分の内なる世界を「築く」ことであると同時に気づくこと
- ② 知識を得るためだけでなく、それ以上に私たち人間に多くの作用をもたらすもの
- ③ 情報をそのまま受け止めるのではなく、表面にとらわれずに対象の質を見極める力や、その情報を取捨選択する基準と判断力を養う行為

このように、読書は①に示すように「自己の内面的世界を豊かにし、その過程において「人間の内側に現実や他者を理解するための「受け皿」をつくること」（山元 2015）を可能にする。②の「多くの作用をもたらす」とは、自分とは異なる他者の意見を論理的に読み取る力のみならず、前述した3つの対話からもたらされた自らの問いを吟味することや、様々な視点にたって考えることなどが挙げられよう。③は、批判的思考（クリティカルシンキング）につながる熟慮的思考や吟味思考などを養うことが想定される。

自分の思考過程を意識的に吟味する内省的で熟慮的な思考は、批判的思考において重視される力であると楠見 (2022) は述べている。与えられた情報をうのみにするのではなく、事実を正確に理解したうえで、どこがよいか、どこに問題があるかを客観的に分析して、考察する熟慮的な思考は、読書によって身につけることができる重要なスキルの一つになっていくと考える。

大西 (2025) は、熟慮的な思考と書くことの連関において、①自己の外的・内的世界の拡充をはかる②他者の視座から自己を捉え直す③創造性を豊かに働かせることが重要であることを考察している。これらは、読書教育における言語活動においても重要な観点になっていくと想定される。

(2) 大切な本、忘れられない本の重要性

子供の読書活動の推進等に関する調査研究 (2017年) によると小学生、中学生、高校生ともに、大切な本や忘れられない本が「2冊以上ある」と回答した児童・生徒は、特に読んだ本の冊数の平均値が高くなっていることを明らかにしている。

秋田 (2019) は、読書の量だけでなく、読書の質としての忘れられない本や大切な本との出会いを通して、読書への誘いが行われ、それらの経験が積み重なり、読書の意義を生徒が認識するプロセスを形成していくことの必要性を指摘している。

読書教育を推進する際に、読書の意義を学習者が認識するプロセスを形成していくことは重要な観点である。大切な本や忘れられない本との出会いは、読書の世界を拓いていく契機となり、思考する力が育まれていくことにつながっていくのではないだろうか。

Ⅲ 読書を拓き、思考力を育成する文章指導

1. 読書環境の現況アンケートの実態

読書環境の実態を把握するためにアンケート調査を行った。対象は、異なる特性をもった二つの母集団を選定した。一つは一般の読書に親和性を持った国語教育を専攻する大学生とした。もう一つは前者の対極にあると考えられる看護学生を対象とした。読書に対する苦手意識や読書機会の実

態を、より明確に把握するために、これら異なった特性を持つグループを対比調査した。A 看護専門学校「文学」受講生の実態を把握するために、2024 年 4 月に「文章を書くことと読書」に関するアンケートを行った。対象としたのは、2024 年度の「文学」受講生（1 年生 14 名）である。回答者は 13 名である。項目は、①「文章を書くことは好きですか。」②「①の理由、小中高、その他の事例、文章を書くことに関して印象に残っていることがあれば書いてください。」③「本を読むことは、好きですか。」④「③の理由、読書に関して印象に残っていることがあれば書いてください。」⑤「小中高、その他を通して一番よく本を読んだ時期はいつですか。その理由も書いてください。」の 5 項目である。

①「文章を書くことは好きか」という質問に対し、ア好き イどちらかと言えば好き ウどちらかと言えば嫌い エ嫌い の選択肢を用意した。その結果、好きと答えた学生は、38.4%、どちらかと言えば嫌いな学生は 53.8% と高い割合である。文章を書くことに対して、苦手意識を持っている学生の実態が伺えた。③「本を読むことは好きか」という質問に対して、61.5% が好きだと答えている。どちらかといえば嫌いな学生は 30.8% であった。④「本を読むことが好きな理由やきっかけ」として、小学校の司書の先生と仲がよかった、読み聞かせがよかった、などが挙げられていた。「本を読むことが嫌い」な理由として長い文章を読むことが好きではない、などが挙げられている。⑤「小中高、その他を通して一番よく本を読んだ時期」という質問に対して、小学校、38%、中学校 38%、高校 15% であった。小学校の理由としては、朝読が多く挙げられている。司書の先生が本を読む楽しさを教えてくれたという回答もあった。中学校の理由として、本を読んでいくと自分の頭の中で世界が広がっていくという回答があった。

A 大学の大学生の現状を探るため、教職課程科目「国語科授業法」の 2025 年度受講生（学士課程 3 年生 15 名、修士課程 1 年生 3 名、2 年生 1 名）に読書に関するアンケートを行った。上記とほとんど同じ項目であるが、新しくつけ加えた項目も

若干ある。回答者は、15 名であった。アンケート時には、回答結果は成績に影響しないこと、回答結果は読書教育に関する研究目的以外使用せず、研究成果の公表は個人、大学、学校が特定されないように匿名性を厳守することを伝えている。

③「本を読むことは好きか」という質問に対して、100% の学生が好きであると答えている。

⑤「小中高、その他を通して一番よく本を読んだ時期」という項目（複数回答可）に対して、小学校、53.3%、中学校 40%、高校 0%、大学 20% であった。

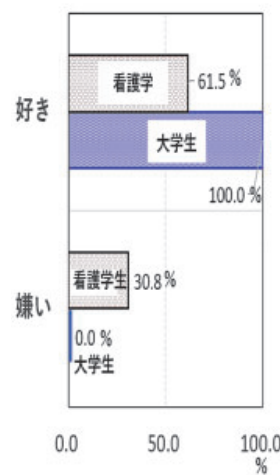


図 3 本を読むのが好き・嫌い

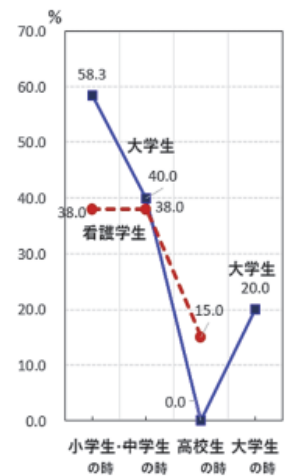


図 4 本を一番よく読んだ時期

「一か月にどれくらい読みますか」の項目には、4 冊以上が 76.9%、1 冊から 2 冊が 13%、0 冊は 1% であった。4 冊以上の内訳は、10 冊以上が 20%、5 冊から 9 冊が 20% であった。看護学生と大学生の③と⑤についての結果を図 3、図 4 に示している。

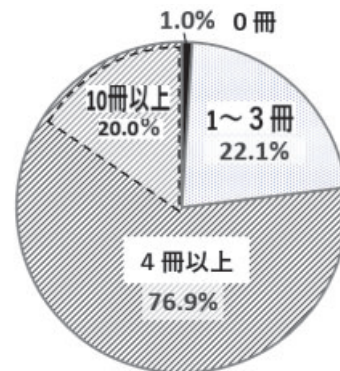


図 5 大学生の一か月に読む本の冊数

この調査から、図5に示すように、大学生は、1カ月に8割の学生が4冊以上の本を読んでおり、高校では本を読む機会が少ないと回答しつつも、大学生になった現在も読書習慣が身につけている現状が伺えた。これと比して、A校の看護学生の実態調査から、以下のことが明らかになった。

- ・文章を書くことに苦手意識をもっている学生が5割ほどいる。
- ・6割の学生は本を読むことが好きであるが、3割の学生は、読書に苦手意識をもっている。

2. 読書に向かう「本の紹介文」作成の授業の実際

(1) 「お薦めしたい本の紹介文」の言語活動

上記の看護学生の実態から、文章を書くことへの苦手意識を払拭させ、読書への意識を高めるために、「看護師をめざす仲間にお薦めしたい本の紹介文を書く」言語活動を行った。学習の流れを次に示している。

【学習の流れ】

第一次 「本の紹介文から書き方を学ぶ。」

- 1 お薦めの本、5冊の紹介文を読み、一番印象に残った紹介文を選び、共感したことや、読んでみたいと思った理由を書く。
- 2 紹介文を書く際の技を見つける。
- 3 グループで交流し、全体への情報を共有する。
- 4 全体の交流を経て、自分が興味を持った作品を改めて振り返り、その理由、考察を書く。

第二次 「看護師をめざす仲間を読んで聞かせたい本を選び、紹介文を書く。」

- 1 書く時の留意点を確認する。
- 2 どのスタイルで本の紹介文を書くのかを選び、持参した本から下書きを作成する。
- 3 グループで、自分の選んだ本の簡単なブックトークを行う。
- 4 書いた作品は、相互推敲する。
- 5 下書きを推敲して清書する。

第三次 「皆の作品から自己省察をとおした振り返りを行う。」

- 1 グループごとに代表者3人が、本を用いてブックトークを行う。
- 2 どのブックトークがよかったのか講評し、これまでの学習を振り返る。
- 3 冊子に皆の作品を互いに読み合い、どの作品がよかったのか講評を書く。これまでの学びを振り返り、省察する。

(2) 本の紹介文から書き方の技を見つける

「読書への招き」として教師が書いた以下の4

冊の本の紹介文を学生に示した。

『君たちはどう生きるか』 吉野源三郎 岩波文庫
『羊と鋼と森』 宮下奈都 文春文庫
『山椒大夫』 森鷗外 新潮文庫
『おバカさん』 遠藤周作 角川文庫

どの作品の書き方が印象に残ったのか、自分にとって意味のある作品を選び、その理由と共にグループで交流活動を行い、全体に発表させた。一番支持が多かった『山椒大夫』の紹介文を次に示している。

『山椒大夫』の紹介文

「ごらん。もう春になるのね」

これは、弟である厨子王を人買いである山椒大夫のもとから逃がすために、自分の死を覚悟していた時の姉の安寿の言葉である。この一文の前には、次の文章がある。

「安寿は重（かさ）なり合った岩の、風化した間に根をおろして、小さい堇（すみれ）の咲いているのを見つけた。」

人買いによって母と祖母と別れ別れになり、船で丹後に運ばれた安寿姫と厨子王の話は絵本などでも有名である。弟を逃した後、安寿が亡くなったとは一言も書かれていない。ただ、「山椒大夫一家の討手が、この坂の下の沼の端で、小さいわらぐつを一足拾った。それは安寿の履であった。」という文章から、読者は、安寿が近くの沼に身を投げて亡くなったことを知るのである。そして、安寿の健気さに胸を打たれる。（中略）

厨子王は丹後の国分寺に逃げ込み、寺の住職に助けられる。教育を受けると共に、紆余曲折を経て領主となっていく。その後、人買いという制度を改めさせていく手腕も見事である。厨子王は、生き別れた母の行方を求めて佐渡に訪ね歩くが、母との再会の場面は、ぜひ本書で読んでほしい。

安寿の「自己犠牲」の姿、山椒大夫の追手に対して、凜とした姿で厨子王に手を差し伸べ、追っ手からかくまう住職の姿や弟を思う姉の心、母親をいつまでも大切に思う子どもの心及び子を思う母の真心。短編小説でありながら、何度読み直しても新たな感動を与えてくれる作品である。

『山椒大夫』の本の推薦理由として挙げた主なコメントを次に示している。

ア 書き始めの「ごらん。もう春になるのね」という会話から書いていることが印象に残った。

冒頭の会話から入る工夫がよい。自分も人をひきつけられるような書き始めにしたい。

イ 冒頭の書き出しの工夫がよい。「何度読み直しても新たな感動を与えてくれる」とあるが、どのような新しい感動があるのか気になった。

ウ 「沼の端で小さいわらぐつを一足拾った。そ

れは安寿の履^{くつ}であった」というところに、姉の弟へのとても大きな愛と弟のためなら命を絶つ覚悟が見えた。このように冒頭に印象に残る文章の1節を入れるとよい。どのような作品であるのか簡潔に表現しているのがよかった。

ア、イの学生が指摘するように、冒頭の書き出しでは、読みが気になる書き方の工夫をした方が実際に読んでみたいという気持ちにさせることやウの学生が捉えているように、お薦めの一節があった方が読み手の印象に残りやすいことに学習者は気づいていることがわかる。

(3) ルーブリックの役目を果たす「紹介文を書く技」

堀江（2015）は、学習者から引き出した＜言葉の力＞のワザ表の意義として「身につけたい力」を目に見える形にすることの重要性について言及し、言語活動の観点を可視化する「ユニバーサルデザイン」的配慮に基づくためにも重要な観点であると述べている。言語活動で身に付けた「言葉の力」をワザ表によって目に見える形にすることは自分がどのような工夫を凝らして書いたかということをもた認知する場となっていくというのである。学習者が見つけた書き方の技を教師が整理し、まとめたものを表1に示している。項目の分類は教師がまとめている。

表1 「本の紹介文を書く技」

<p>【表記の仕方】</p> <p>① 文体は統一して書く。</p> <p>② お薦めの一節（フレーズ、会話）を入れる。 自分が心魅かれた一節を抜き出す。</p> <p>ア 本の中のセリフは、「 」をつけて強調する。</p> <p>イ どこに視点を置くのか一例を挙げる。</p> <p>ウ 文章の中で読んでほしい一文を書く。</p> <p>【構成】</p> <p>エ 結末を言わないでおくことにより、読み手が興味を惹かれるようにする。</p> <p>オ あらすじを簡潔に書くが、全ては書かない。</p> <p>カ 5W1Hを入れる。</p> <p>③ 興味をひきつけるような書き方</p> <p>キ 冒頭部分に一番言いたいことを書くのも一つの方法。</p> <p>ク 問題提起の形で書くとよい。（疑問形で興味を持たせる。）</p>

- | |
|---|
| <p>④ 登場人物を明確にする。
誰が主人公なのか、主人公はどのような人物なのか、主人公の情報を入れる。</p> <p>⑤ 段落をつける。三段構成を意識する。</p> <p>⑥ 最後の結びの文章は、読者に本を読ませるような書き方の工夫をする。</p> <p>【自己の体験や看護師としての視点を踏まえて書く】</p> <p>⑦ その本との出会いの情報も入れるとよい。</p> <p>⑧ 自分の経験、体験と切り結ばせながら書くとよい。</p> <p>⑨ 看護師をめざす者としての視点を入れるとよい。</p> |
|---|

学生から引き出したお薦めの本の紹介文を書くための技は、「学びの質的な面を重視する「評価基準」へと変換する換算表」として作用し、紹介文を書く際の観点として授業実践を支えるルーブリックの役目を果たしていき、学習者の学びの形成を深めていくこととなる。全ての観点を採りいれる必要はなく、取捨選択をしながら紹介文作成のためのルーブリックとして活用し、②のお薦めの一節（フレーズ、会話）を入れることを共通認識とした。

このように、皆の見つけた「お薦めの本の紹介文を書く技」の中から、使いたい技を自由に用いながら、看護師をめざす仲間や看護師になった時に患者に読んで聞かせたい本を自由に選び、お薦めの本の紹介文を書く活動を行った。

(4) 読書活動の支援

連休や実習の関係により、3週間の時間的な余裕があったため、学校図書館や近隣の公立図書館を利用してもよいことやこれまでに読んだ本の中で自分が大切に思っている本、かけがえのない本を持参するとよいことを助言した。「文学」の授業では、日ごろから自らの看護観を深めるための看護や医療に関連する本を授業の中でも教材として活用している⁴⁾。本の紹介文作成の前後の授業時には、学生が好きな本を自由に選べるように指導者が関連する本やその他のジャンルの本を幅広く用意し、多くの本と出会える場の設定を工夫して、読書活動の支援を行った。

自分の想いを書けばよい読書感想文と異なり、ビブリオエッセーは、より他者を意識し、内容理解や意見に責任を持って書くことに重点を置いている。著者のプロフィール、本の概要、作品の背

景、感想や批評などを盛り込んでも構わないことや、看護学生としての視点からの考察や、その本から何を得られたのか、またどの点がよかったのかを客観的に伝えて書くとよいことを助言した。

(5) 推敲活動—他者との対話から自己省察へ

本の伝え合いを行った後に、書いた作品をグループの中で交流し、お互いに相互推敲を行い、コメントを書き合った。〈他者からのコメント〉には、次のような言葉が記されていた。

- ・自問自答がいいね。漢字に直せるところは、漢字で書くといいよ。
- ・「たとえば」と例を出しているところがよいと思いました。

コメントは、なるべく肯定的な表現も入れるように示唆したが、相互推敲では、修正すべきところは朱筆を入れて、こうしたらよいという観点を採り入れながら、お互いに推敲を行った。学習者は、それらをもとに、さらに自己推敲を行う。

第一草稿から、清書に向かう過程の中で自分が工夫したことを学習者は次のように書いている。

- ・最後の終わり方を問いかけで終わろうと決めていたので皆の経験を問いかけにした。
- ・一番伝えたいところは、皆が共感してもらえるように少し表現を変えて、強調する表現に変えていった。

こうした「他者との対話」を経て、さらに「自己との再対話」の学びを行っていることがわかる。こうした学びを経て、第一草稿の構成を大きく変え、清書に反映させていく学生の姿が多く伺えた。Nさんは、本日の「振り返り」に、次のように書いている。

相手に伝わるように具体的に文章を書くことが難しかったので、よい機会でした。初めはどの言葉に焦点をおくといいのかとまどいしましたが、他の人の紹介を聞く看護師の視点から伝えたいことにひきつけて考えていくといいことがわかり、そのあとは不思議なくらいすらすらと書くことができました。先生や友達のアドバイスを聞きながら書けたので、皆に感謝です。

このように、「自己内対話」による第一草稿の

紹介文を周囲の学生から助言を受ける交流活動を通して、着目したい言葉のありかに気を配りながら清書を書き上げていく姿が伺えた。学習者は、こうした言葉の振り返りを通して、身につけたい言葉の力や、身につけた言葉の力を再確認していった。

(6) 思考力を働かせる内省的な振り返り

荻谷 (2019) は、何かを書くという過程には、より反省的な振り返りが組み込まれていると述べている。推敲とは、内容と表現とをどのように結びつけたかを振り返りながら、考えた内容を少しでも読みやすく、伝達力という点で効果的な文章にしようとする過程であるとも示唆する。思考と言葉（表現）との行ったり来たりという反省や振り返りをどれだけうまく使いこなすかが言葉の力の重要なはたらきになるというのである。さらに、荻谷 (2019) は、文章を書く際には、「振り返る過程自体が、ことばの力をつける上での重要で有効なトレーニングの機会になる」と述べ、口頭のコミュニケーションではできない思考力の発揮であり、思考力の鍛え方であると指摘する。これらをふまえると、他者に伝える本の紹介文作成過程においても次の二つのことが重要であると考えられる。

- ① 自己の省察的な振り返りを繰り返す
- ② 読むことと書くことの往還により、思考を巡らす

先述したNさんは、推敲の過程で、「相手に伝わるように具体的に文章を書く」ためには、「どの言葉に焦点をおくといいのか」について思考を巡らせ、他者の本の紹介文を読む活動を通して「看護師の視点から伝えたいことにひきつけて考えていく」とよいことを学んでいる。

IV ビブリオエッセー作成を通じた学び

1. ビブリオエッセー「耳を傾けたい、その声に」の考察

「ビブリオエッセー」は、2019年4月から2025年8月までの約5年半にわたり、「私の一冊」として産経新聞夕刊1面に読者の投稿が長期連載されたものである⁵⁾。作成した「本の紹介文」を産

経新聞「ビブリオエッセー」に応募することに賛同してくれた学生は11人であった。その作品中、4人の学生の作品が産経新聞に掲載された。次頁の【資料1】は2024年7月31日付夕刊に掲載されたH・Kさんの「ビブリオエッセー」である⁶⁾。『52ヘルツのクジラたち』を再読して、新たに発見した自らの思いをしっかりと伝えている。「声なき声にも耳を傾け、手を差し伸べられるようになりたい」と自分のめざす看護師としての視点から思考を巡らせていることが伺える。

冊子にした皆の作品及び新聞に掲載された4人のビブリオエッセーを紹介し、どの作品がよかったのかという講評を書かせた。その後改めて自分の作品を振り返り、気付いたことを書く活動を行った。H・Kさんの「耳を傾けたい、その声に」に寄せられたコメントを以下に記す。

〈「耳を傾けたい、その声に」に寄せられたコメント〉

ア 人のやさしさが人を救う話に感動した。人の心と声はトラウマを克服させるほどの勇気を与え、癒すその過程は看護職を目指す自身にとっても響いた。

言葉の使い方一つで人を傷つけたり、人を癒したり、とても考えさせられる内容だった

イ 声をあげても大人に届かない子や大人がいる人たちと他のクジラたちに聞こえない高い周波数の比喩表現がとても気に入った。自分とも共感できる部分があり、この本を選んだ。

ウ 「だからお願い。52ヘルツの声を聴かせて」という文を自分が印象に残っている文章として書いているところがいいと思いました。自分も将来、医療に関わるうえで大切にしたいこと、本の内容の「ここは、自分はそうはならない」というところをしっかりと書けていてとても印象に残ったので選びました。

学生アは、「人の心と声はトラウマを克服させるほどの勇気を与え、癒すその過程は看護職を目指す自身にとっても響いた」と自らの看護観と照らし合わせながら考察をしている。

また、言葉の使い方一つで生じるその功罪に着目し、「言葉の使い方」の重要性について思考を

巡らせている。学生イは、声をあげても声をあげても届かない子や大人と他のクジラたちに聞こえない高い周波数の声を「52ヘルツの声」と表現する比喩表現の特色をきちんと捉えている。学生ウは、「だから、お願い。52ヘルツの声を聴かせて」というキナコのひたむきな言葉をH・Kさんが一番印象に残っている言葉として書くことにより、読み手がひきつけられるその効果を評価している。さらに、H・Kさんが本の内容を吟味し、「ここは、自分はそうはならない」というところをしっかりと批判的思考を働かせており、自分が医療に携わるうえで大切にしたいところをきちんと伝えているところを評価している。

2. ビブリオエッセー「託された大切な言葉」の考察

次頁の【資料2】は、2024年8月19日付夕刊に掲載されたAさんの「ビブリオエッセー」である⁷⁾。『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ—若き医師が死の直前まで綴った愛の手記』について、「ひとりで悩み、ひとりで苦しみ、ひとりで泣く」人の苦悩を察する井村氏の思いを受け止めつつ、看護師をめざす立場から生と死についてしっかりと自分なりの考察を行っている。Aさんのビブリオエッセー「託された大切な言葉」は、幕を閉じる7、8月の最後の月間賞を受賞した。

Aさんは、月間賞の受賞後、受賞のインタビューに次のように答えている。

「新聞の1面に自分の文章が載るとは信じられない驚きでした。さらに月間賞で2度目のまさかです。しかもビブリオ最後の月間賞と聞いて3度目の感激は言葉になりません。看護専門学校の授業で選んだ一冊でした。有名な本だとは知らずに開いたページの印象から書き始めたのですが、読み進むと医師である著者の思いがやがて未来への希望に変わっていくことに深く感動しました。医療の現場で働く自分の将来に重ねて、この本への感謝は尽きません。」

井村医師の思いが未来への希望に変わっていった経緯を自分がこれから進む看護師としての思いと重ね合わせて考えていることが伝わってくる。「この本への感謝は尽きません」という言葉から、

【資料1】 2024年7月31日付産経新聞夕刊に掲載されたH・Kさんの「ビブリオエッセー」

ビブリオエッセー

耳を傾けたい、その声に 兵庫県姫路市 H・K (18)

【52ヘルツのクジラたち】 町田そのこ(中公文庫)

「52ヘルツのクジラ」は他のクジラたち聞こえない高い周波数で鳴く世界でたった1頭のクジラ。その声は誰にも届かない。世界で一番孤独と言われているクジラだ。私はその存在を最初、韓国の人気グループの曲で知った。

この小説のタイトルに引きつけられて読んだのが数年前。今年は映画の公開で再び話題になり、再読した。感動がよみがえった。

主人公は20代の女性、貴瑚(きこ)。キナコと呼ばれている。母や継父に愛されず、虐げられてきた。都会を離れ、一人で移り住んだのがキナコを愛した亡き祖母の家だ。その海辺の地で、母から壮絶な虐待を受け声の出なくなった少年と出会う。ムシと呼ばれていたこの少年をキナコは助け出し、「52」と名づけた。キナコもかつて、アンさんという友人の献身的な愛に支えられた過去があった。

小説はネグレクトやDVなどの社会問題とともにジェンダーにもふれている。だが決して暗いだけの物語とは思わない。感動と勇気をくれる作品なのだ。「だから、お願い。52ヘルツの声を、聴かせて」というキナコのひたむきな言葉が今も頭から離れない。

この世界には52ヘルツの誰にも届かない声を上げている人たちがたくさんいるのではないだろうか。私は将来、医療に携わる仕事をめざしているが、そんな声なき声にも耳を傾け、手を差し伸べられるようになりたい。傷ついた心に寄り添えるように。心からそう思った。

Aさんにとってこの本がかけがえのない1冊になっていることが伺える。産経新聞2024年9月26日付夕刊に掲載された月間賞の選者は、次のように述べている⁸⁾。

福嶋聡(ジュンク堂書店難波店店主)「『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へー若き医師が死の直前まで綴った愛の手記』は僕が本屋の仕事をした頃からあった本。それを若い人が選んで書いてくれました。この本は書き残しておくことの大切さを感じてすごいなあと思いました。どんな本を選ぶのかも重要です。自殺の問題など著者の思いを具体的に取り上げている点もいいと思いました。」

江南亜美子(書評家・京都芸術大学専任講師)「模範解答的すぎない素直な書きぶりに、ぐっときますね。19歳の若者が自分の生まれるはるか前の本を選び、きちんと読んで文章化してくれた。ビブリオエッセーのひとつの理想のかたちでした。」

二人の選者は、「40年以上も昔に書かれたこの本が私にこれからの道を示してくれた」という一文につながる自殺の問題について、井村医師の思いを自分なりに受け止めて素直に表現していることを評価しており、本を選書することの重要性を示唆している。

V ビブリオエッセー作成を通じた主体的行動へのつながり

ビブリオエッセー作成を通して学生は、どのような学びを得たのか、以下学生の振り返りをもと

に考察していく。

1. ビブリオエッセー「託された大切な言葉」を選んだ学生の読書への動機づけ

A 話の内容がわかりやすく読みやすかった。本の内容は、31歳でこの世を去った医師が、今後の娘さんに向けて書いた本である。私は、特に「生きている限り生き、歩ける限り歩く」、「けっしてあきらめるな」という文が心に響いた。実際に読んでみたいと思った。

I 冒頭、自殺について書かれていて、私の友人にもずっと悩んでいた子がいたことを思い出した。(中略)井村医師のように、その人の苦悩を思いやれる人に私もなりたいと思った。主人公の井村医師は、病気にかかり、足を切断してもなお患者のために仕事に取り組む、いつ死ぬかわからないのに娘たちに残す手紙が、私からすると切なくて…。この本をもっと読みたいと思った。

Aの学生は、自分が一番心に響いた一節を根拠と共に示すことができている。Iの学生は、自分の経験と照らし合わせながら、井村氏のようにその人の苦悩を思いやれるような人になりたいとしっかりと自分の考察を述べている。両者共に、この本を読みたいという読書に対する動機づけが促されていることが伺えた。

【資料2】 2024年8月19日付産経新聞夕刊に掲載されたAさんの「ビブリオエッセー」



ビブリオエッセー

託された大切な言葉

Aさん

「飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ」若き医師が死の直前まで綴った愛の手記 井村和清（祥伝社）

印象に残ったのは「自殺について」という一文だった。井村和清医師はこう書いている。「自殺をする人間は弱い人間、とよく言われます。しかし、私はそうは思わない」。井村医師は「ひとりりで悩み、ひとりりで苦しみ、ひとりりで泣く」人の苦悩を思い、学生時代に同じ下宿にいた後輩の自殺や自分が扱った中年女性と8歳の少年の自殺未遂をふり返っている。いつも話を聞いてあげていた後輩が一番悩みぬいているとき傍らにいてやれなかったことを井村医師は悔やんでいた。私はこれだけ真剣に人を思う優しさに胸を打たれた。

この本は不治の病に倒れた井村医師が2人の娘と妻、両親、周囲の人たちに向けて書いた遺稿集だ。このとき長女の飛鳥さんはまだ2歳。次女の清子さんは母の胎内において、井村医師にとって「まだ見ぬ子」だった。

井村医師は病で右足を切断し、義足と杖で病院へ復帰した。やがて胸の痛みを覚える。自分の体が耐えられるぎりぎりまで患者を思う医師の姿に心打たれた。そしてあとだけだけ生きられるか分からない状態の、その苦しみを思うとふと弱気になる場面で「生きている限り生き、歩ける限り歩く」と前を向く。ひとりりで苦しみ、背負い自殺まで考える人々には「けっしてあきらめるな」と書いた。生きようよ。

娘たちへの手紙に「心で私を見つめて、らん」と書き残した井村医師。「心の優しい、思いやりのある子に育って欲しい」と何度も繰り返している。さぞかし心残りだっただろう。31年の人生はあまりに短い。

看護師をめざしている私は井村医師の言葉を大切にしたい。40年以上も昔に書かれたこの本が私に、これからの道を示してくれた。

2. 皆の作品を通した学習者の社会生活への反映

冊子にした皆の作品を読み、改めて自分の作品を振り返った際に、気づいたことや考えさせられたことを書かせた。学生の振り返りを次に示す。

ア とても読み応えのある作品ばかりで実際に読んでみたくなった。どれも命の尊さや命に触れるような作品が多く、とても考えさせられるようなものばかりだ。人の死を選ぶとはどういうことなのか、どのような意味があるのか、患者に寄り添って患者の気持ちの意味を考えられるような看護師になりたいと考えさせられた。

イ 人の命は何があっても人によって侵されるべきではないと改めて感じさせられた。自分の作品は、死が救いかどうかテーマに綴ったが、心が人の心を救うお話^{ママ}を読んで、心が人を成り立たせているから、感じなくなることは、すなわち、心が死んでいる、死と同義ではないかと考えさせられた。

アの学生は、命の尊さに触れる作品から、患者に寄り添い、患者の気持ちの奥にあるその意味を考えられるような看護師になりたいと自分の思いを伝えている。イの学生は、自分の作品とは別の観点から書かれている他者の作品から、死についての思考を巡らせている。このように、他者の作品を読むことを通して、改めて自分の看護観と切り結ばせながら、生と死について吟味したり、熟考したりする過程を通して、社会生活への反映が伺えた。

3. 新聞に掲載された学生の振り返り

ビブリオエッセーが新聞に掲載された4人の学生の振り返りの抜粋を次に示す。

ア 文章を書くことに対して、苦手意識をもっていたが、少し自分に自信がついた。こうした振り返りを書く時などで自信を持って文章を書けるようになった。

イ 自分は今まで文章を書くことに苦手意識を感じていました。今回、ビブリオエッセーに選んでいただき、自分の気持ちの伝え方や言葉選びに自信ができました。言葉は少しでも変えると意味や伝わり方が変わることを学びました。

ウ 自分の文章に共感してくれた人が多く、改めてこの小説を読んでよかったと思えた。また本を読もうという気になれた。（資料1のH・Kさん）

エ 授業中に初めて読んだ本が選ばれて、とても嬉しかった。自分の作品を読み、改めてこの本の良さを感じることができた。（資料2のAさん）

これまで文章を書くことに対して、苦手意識をもっていたア、イの学生が、ビブリオエッセー掲載をきっかけに自らの気持ちの伝え方や言葉選びに自信をもって臨むことができるようになったことが伺える。ウ、エの学生は自分の選んだ本の価値について改めて認識し、思考を巡らせている。他者からの共感、読書に向かう動機づけを拓く一助になっていくことが伺えた。

Ⅵ 考察と今後の課題

「文学」の最終授業に、これまでの授業を通して、自分にとって意味（価値）があると感じた取り組みとその理由を書かせた。「お薦めの本の紹介文作成」は、「『看護とはどんな仕事か7人のトップランナーたち』を読んで」と並び、最も学生の評価が高かった。学生が書いた「文学」の授業の学びの振り返りの抜粋を以下に示す。

ア 本の紹介文を作成することで、本を読み、要約して他者に紹介し、自分のお気に入り人を人に伝えることができた。友達の作品にコメントを書くことにより、多く本を知ることができ、素直な感想を伝え合うことができた。

イ 「文学」の授業において文章を書く機会がたくさんあった。私達は、看護師を目指す中で実習レポートや患者さんの記録など多くの機会に文章を書くときがある。その時に、臨機応変に正しく書くことは重要だと考える。また、友達の作品にコメントを書くことにおいて、その時に自分がどう思ったかをきちんとまとめる力、相手に思っていることを伝える力がついたと考える。

このように、他者に伝えようとする本の紹介文作成において、学生は次の二つの力を身につけていったことが確認できた。

- ・書く過程におけるさまざまな振り返りを通じた自己を省察する力
- ・他者との伝え合いから熟慮的思考を巡らせる力

において、振り返る過程を何度か繰り返した。こうした学習活動を通し、より他者の作品や自己の作品について吟味する力や熟慮的思考力の萌芽を確認することができた。図6は、読書環境の現況をもとに、読書教育と文章指導により思考する力を拓き、主体的行動から読書環境を改善するまでの過程を示した概念図である。図に示したように、自己を省察する力は、やがて、看護師として問題に直面したとき、自分自身の判断を自覚的に問いかけ続け、吟味して熟慮する力及び多角的な思考力を深めていくのではないかと考える。これを具現化している学生の振り返りの抜粋を次に記す。

「文学」の授業を通して、他の人のレポートや課題の紹介を聞いている時が一番学びがあった。誰かの作品を聞く度に自分にはない視点からの考察や表現力、言い回しなど多く見聞できてとても興味深く感じていた。

また、日常生活で関わる人のまだ見ぬ感性や多様な価値観を知ることができ、その人の日常の言動だけでどういう人物かを決めつけていたことを知った。いわゆる「バイアス」で他の人を理解しているつもりになっていたことがわかり、一元的な視点になっていることに気づくことができた点もこの授業で学んだことである。

このことから、他者の意見や価値観に触れることで、自分の見識を広げる大切さと他者をバイアスで決めつけず、受け止める重要性、多義性を認める多角的な視点が重要だとわかった。

この振り返りが示すように、他者に作品を紹介するという伝え合いを通じた読書教育と文章指導によって、次の三つの思考する力を具現化できるようになった。

- ア 自分の思考過程と自己を省察する力
- イ 他者との伝え合いから熟慮的思考を巡らせる力
- ウ 多角的な視点を包括する思考力

今回の実践において、Ⅳ章の資料1に示したビブリオエッセーを例にとると、アに示された「自己の思考過程と自己を省察する力」の育成により、将来の医療に携わる仕事における決意が導き出されている。これは、将来の社会生活への反映であり、主体的な行動への萌芽となったと考えられる。

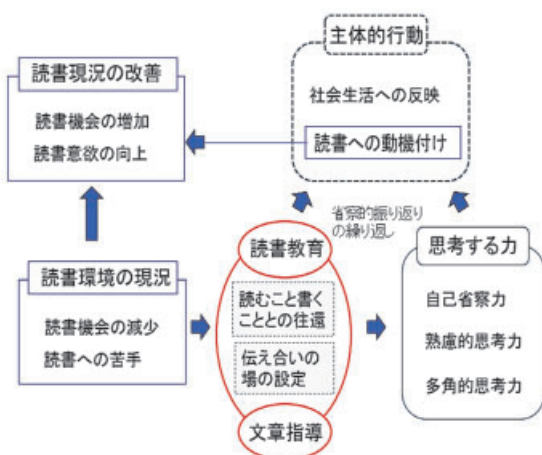


図6 読書教育と文章指導の概念図

本を紹介するという仲間と交流する活動の中に

Ⅲ章で示した図4の「本を一番よく読んだ時期」のグラフからは、高校生の時の大きな落ち込みが明示されていた。大学生の時には復帰傾向が読み取れたが、今回の実践は、この復帰傾向の延長にある社会人になった時に、さらに読書への動機付けを促進するものと考えている。ひいては、読書機会の増加や読書意欲の向上により、生涯にわたって読書に親しむ習慣を養い、読書現況の改善につながればと期待している。

自分の思考過程と自己を省察する習慣が形成できるように、学生の読書に向かう動機づけや思考する力を拓いていく方法を今後も探究し、主体的な行動の育成につないでいきたい。

また、読書への啓発を図るために、医療や看護関連に関するお薦めの本の紹介や、リストの一覧を学生と共に作成して共有することや、近隣の図書館や学校図書館との連携を図ることなどの読書活動への支援については今後の課題である。

謝辞

アンケート調査に回答くださったA看護専門学校、A大学の学生の皆様、ビブリオエッセー掲載に際して学生と丁寧なやり取りをとおして、学生の思考を拓いてくださった荻原靖史氏（元産経新聞編集委員）に感謝申し上げます。4人の学生が書いた手紙の返信に、荻原氏から次のような言葉をいただきました。「読書は、自分の世界を無限に広げてくれるはずです。本を読むことで人と人がつながる瞬間もあることを、これからも話してあげてください。」ここに記して深謝します。

【註】

- 1) 文部科学省（2017）「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説国語」p.28
- 2) 全国学校図書館協議会（2024）第69回学校読書調査報告「「きっかけ」を作って、本へ導こう」『学校図書館』No.889、pp.17-22
図1と2は、本書の資料を参考に作成している。
- 3) 藤森 裕治（2019）「大学生・成人の読書と生涯発達」『読書教育の未来』pp.73 - 795
- 4) 久常 節子『看護とはどんな仕事か7人のトップランナーたち』（2004）勁草書房をはじめ、看護、グリーンケア、医療に関する10冊以上の本を授業において活用している。
- 5) 「ビブリオエッセー」は、荻原靖史産経新聞編集委員が山

上直子論説委員と2人で考案したことから端を発していることを荻原氏からお聞きした。2019年4月から2024年8月までの約5年半の1320回を荻原靖史編集委員が担当された。

- 6) 「耳を傾けたい、その声に」産経新聞2024年7月31日、夕刊、4版、p.1
- 7) 「託された大切な言葉」産経新聞2024年8月19日、夕刊、4版、p.1
- 8) 「ビブリオエッセー選考会」産経新聞2024年9月26日、夕刊、4版、p.3

【引用・参考文献】

- 秋田 喜代美（2019）「中学生・高校生における読書」『読書教育の未来』日本読書学会編ひつじ書房 pp.64-65
- 大西 光恵（2025）「熟慮的思考を導く「歳時記的方法」を用いた表現指導—複数の作品を評価して読むことを通して—」『立命館教職教育研究第12号』pp.39-49 立命館大学教職教育推進機構
- 荻谷 剛彦（2019）「徹底的に読み、書き、考えること」『ことばの教育を問いなおす—国語・英語の現在と未来—』ちくま新書1455、pp.228-229
- 楠見 孝（2022）「批判的思考とメディアリテラシー」坂本句、山脇岳志編『メディアリテラシー—吟味思考（クリティカルシンキング）を育む』時事通信社 pp.196-197
- 徳永 加代（2022）「教員養成課程における読書指導力の育成—「ビブリオエッセー」の作成を通して—」『言語表現研究第38号』兵庫教育大学言語表現学会 p.101
- 堀江 祐爾（2015）『言葉の力を育てる！堀江式国語授業のワザ』明治図書 p.22
- 文部科学省「国語に関する世論調査」の結果の概要「読書量の変化」http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/94116401_01.pdf（2025年8月13日確認）
- 山元 隆春（2015）「本と「読むこと」と人間」『読書教育を学ぶ人のために』山元隆春編世界史思想社 pp.10-12

